

おひとりさま事例集（４） ～最期を迎える場所～

今回の主人公は、岡田恵子さん（82）です。UR 賃貸住宅にお住まいで、ご結婚の経験はなく、子供もいない方です。

恵子さんは、排尿障害を患っていましたが、半年ほど前から、自力での排尿が困難となり、バルーンカテーテルを装着しながら、ご自宅でのひとり暮らしを続けていました。それ以外は、介護保険に頼ることもなく、自立した生活を送っていました。



ところがある日、設置していたセコム生活センサーが異常をキャッチし、セコムの隊員がご自宅に駆け付け、私も遅れて駆け付けました。

セコムが預かり管理していた鍵を使って室内に入ったところ、本人が台所の近くで倒れて動けなくなっていました。しかし幸いなことに、意識もあり会話も何とか可能な状態で、ほっと胸を撫でおろしました。

救急車も呼んでいたこともあり、そこからすぐに緊急搬送をしようとしたところ。本人が「救急車には乗りたくない。入院なんてしたくない。」の一点張りで、救急車に乗ることを拒否したのです。

恵子さんはかなり取り乱しており、支離滅裂なことも叫んだりしていましたが、「入院はしたくない、ここで最期を迎えたい」という気持ちは一貫しているということだけは、その場にいた誰が聞いても理解できました。

こんなとき、私たちはご本人の意思を最大限に尊重します。無理やり救急車に乗せるようなことはしません。

すぐ近所の介護事業所を調べて急いで訪問し、事情をお話したところ、ケアマネと事業所の他のスタッフが来てくださり、「今日の分は、介護保険ではなく自費になりますよ」との声かけの後、倒れたときに尿が入っていたバルーンが破れ、汚れて異臭を放っていた部屋を掃除し、着替え、お風呂まで入れて下さり、訪問医師を手配してくださいました。

改めて恵子さんの意思を確認し、リスクがあったとしても、今後もこの居室で過ごしたいという希望が強かったことから、介護保険認定を新規で申請し、定期的に訪問医師や訪問看護、訪問介護などを受けられる環境を作りました。

その後、これら介護保険のメンバーとうまく連携しながら、恵子さんのひとり暮らしを後方支援し、恵子さんのご希望どおり、ご自宅で最期を看取ることができました。

恵子さんは、自宅で倒れたときになって初めて、「自宅で最期を迎えたい」という気持ちをハッキリと示してくださいましたが、前以ってお気持ちが決まっていれば、ぜひともそうしたお気持ちを私たちにお伝えくだされば、ご希望に沿う環境を整えるお手伝いをさせていただきます。それが、私たちが皆様の「尊厳をお守りする」ということです。